

[最新版\(英語版\)はこちら](#)

最終改訂年月 : 25 February 2004

背景: 肝細胞癌は世界中で最も多い悪性疾患の一つである。可能な治療法は切除術である。肝機能障害および/または解剖学的理由により外科的に治療できる患者は少数に過ぎない。多くの患者に対する介入法が開発されており、癌を凝固させるために熱を産生する局所ラジオ波が用いられてきた。

目的: 肝細胞癌患者における臨床関連アウトカム(死亡率、再発率、有害事象、QOL、入院期間)について、シャム介入、介入なし、他の介入法と比較したラジオ波焼灼療法の作用を評価する。

検索戦略: 2003年10月までのThe Cochrane Hepato-Biliary Group Controlled Trials Register、The Cochrane Controlled Trials Register on The Cochrane Library、MEDLINE、EMBASE、CancerLit、Current Contentsを検索した。確認した記事の参考文献リストはさらなる試験について調査した。

選択基準: 盲検性、言語、公表状況に関係なく、ラジオ波焼灼療法とプラセボ、介入なし、他の治療法との比較を検討するすべてのランダム化試験を選択した。

データ収集分析: 2名のレビューアは独立して試験の選択、試験の質の評価、データの抽出を行った。さらなる情報を得るため治験責任医師代表と連絡をとった。

主な結果: 2件のランダム化臨床試験のみを確認した。患者102名を含む1件の試験は小さな肝細胞癌に対してラジオ波焼灼療法と経皮エタノール注射とを比較した。ラジオ波焼灼療法は無再発生存率を有意に増加させた(ハザード比 0.48、95%信頼区間(CI) 0.27~0.85)、全般的生存率に有意な影響を及ぼさなかった(ハザード比 0.20、95%CI 0.02~1.69)。合併症および副作用の発現率は2群間で有意差がなかった。方法論的に欠点のある別の試験は、肝細胞癌患者72名の病巣94ヶ所において、ラジオ波焼灼法と経皮マイクロ波凝固療法とを比較した。一次アウトカム基準は両群における再発率であったが有意差は検出されなかった。副作用の発現率には有意差がなかったが、腫瘍を完全に焼灼するためには経皮マイクロ波凝固療法の方が有意に長い治療期間が必要であった。

レビューア見解: ラジオ波焼灼療法は小さな肝細胞癌の治療に対して期待される方法となる可能性があるが、さらなるランダム化臨床試験が必要である。

Citation: Galandi D, Antes G. Radiofrequency thermal ablation versus other interventions for hepatocellular carcinoma. The Cochrane Database of Systematic Reviews 2004, Issue 2. Art. No.: CD003046. DOI: 10.1002/14651858.CD003046.pub2.

Clib issue No.: 2005 issue 4

CRG名: Hepato-Biliary

* **ご注意:** この日本語訳は、試験的翻訳(Draft翻訳)版として公開するものであり、翻訳の正確さや質が保証されたものではありません。訳語の間違いなどお気づきの点がございましたら、Minds事務局までご連絡ください。また、この試験的翻訳版はコクラン・ライブラリ2005年issue 4に掲載されたレビュー・アブストラクトの翻訳です。コクラン・ライブラリは年4回改定版が発行されていますので、ご利用に際しては、最新版(英語版)の内容をご確認ください。